



奥山 俊二さん

- 生まれ育ち：南部町金山
- 職業：牛の繁殖農家
- 南部町のここが好き：山の奥で自由気ままにできること

この道で合っていたかな…と不安になるほど山道を登って行ったその先にある一軒の家。

今回の里人は、南部町の金山という集落の“山の奥”に住んでおられる“奥山さん”。

その暮らしを取材しました。

“高校生の頃からの夢”

奥山さんの家の前には川が流れていて、川沿いにはビワやウメの木、花や野草が茂っている。

もちろん畑や田んぼもあり、まさに自然そのもの。

しかし驚くのは自然の風景だけでなく、家の前の道を上っていったその先。見上げると木々のそばや斜面に、自然に溶け込むように牛が放たれているのだ。

もちろん柵やゲートは作ってあるが、手をのばせば触れられそうなくらい間近に大きな牛たちが放されている様子は迫力満点。

今でこそ、この集落で牛を飼っている人は奥山さんしかいなくなってしまうが、金山地区は昔から牛飼いが多い地域で、昔は集落内で牛馬市が開かれていたくらいだったそう。

奥山家も例に漏れず牛飼いの家で、もちろんここで生まれ育った奥山さんの暮らしの中には小さい頃から牛がいた。

高校生の頃から“牛を山に放すこと”が夢だったという奥山さん。役場の職員として勤めながら牛の世話をし、59歳で早期退職した後は牛の頭数を徐々に増やしていった。

そして退職して一年後に“牛を山に放す”夢を叶え、今年の冬には人工授精師の資格も取得された。

現在は親牛8頭、育成牛1頭を飼育している「繁殖農家」。

牛飼いは、繁殖農家の他に肥育農家、酪農家など違いがあるが、この金山地区では昔から繁殖農家がほとんどだったそう。

繁殖農家では、母牛を飼育し子を産ませる。

子牛は、生後9~10ヶ月の頃に家畜市場の競り市に出すか、残して将来、母牛にするかを農家が決める。



母牛に育てる子牛は14ヶ月頃に人工受精し、スムーズにいけばその後10ヶ月くらいで出産する。そして生後18ヶ月頃に、和牛登録協会の方が来て登録検査をし、晴れて大人の仲間入りとなる。

ちなみに山に放たれている牛は「妊婦さん」のみで、11月~5月頃の寒い期間は夕方になると牛たちを牛舎に帰るよう呼びに行くが、夏場は昼夜放牧なのだとか。

“のびとファーム”

雄大で自然いっぱいの自身のフィールドを、奥山さんは“のびとファーム”と名付けた。

のびとファームには、牛たちが暮らしているだけでなく、春はたくさんのお山菜・野草が生えるし、秋にはキノコも見つけられ、四季折々を通して様々な植物に出会える。

取材をさせていただいたこの日も「ササユリが咲いているよ」とのことで、案内していただくと、なんとも綺麗な淡い色といい香り！！

退職後、山の中での生活が中心となりどうしても人との繋がりが薄くなってしまおうと感じた奥山さんは、インターネット回線を引き、友人の井田さん（里人⑧で紹介）に誘われ、ブログを書き始めた。その名も「じげプロ」。「じげ」とはこちらの方言で「地元」という意味だ。



のびとファームでは、このブログを通して繋がった“じげ仲間たち”の集いの場になることもある。山から採ったり持ち寄った季節の食材で野外料理をしたり、キャンプをしたりして楽しむ。

参加人数は30~40人になることもあり、この時ばかりは南部町の山の奥の人口密度が一気にあがるのだとか。メンバーは鳥取東部から西部まで様々なところから集まり、みなさんブログをしているというだけあつてか、それぞれとても個性のある方々で、賑やかな会なのだそう。

牛がのびのび暮らし、人が集う“のびとファーム”は、いつ訪れても魅力に溢れている。



渡邊舞（わたなべまい）/大阪府出身
南部町地域おこし協力隊

～取材者の一言～

奥山さんのお家には、今まで何度か伺ったことがあり、“牛さん”たちにもお目にかかっていましたが、牛農家さんの詳しいお話を伺うのは初めてでとても興味深く、驚きの連続でした。取材後、写真を撮るのに「のびとファーム」の上の方を案内していただきましたが、何度行ってもそこから見る自然の景色に感動します。

色々な話の中で印象に残ったのは「野球選手は打率3割で上出来ですからね。つまり7割は失敗ってことですよね。」という言葉。協力隊として様々なことに挑戦させていただく中で、正直躓くこともあるのですが、とても背中を押された一言でした。